

へボン訳福音書の訳文の成立

——マルコ伝を中心に——

吉野 政治

〔要旨〕 明治の聖書翻訳委員会による日本語訳新旧約聖書以前に刊行されたへボン訳福音書は漢訳聖書に基づいて作られたというのが通説である。しかし、詳細に訳文を検討すると、ギリシャ語原文を正文としつつ、英訳聖書に拠って訳されたものもあり、漢訳聖書は日本語を整える際に利用されたに過ぎないようである。

〔キーワード〕 へボン訳福音書・漢訳聖書・英訳聖書

はじめに

へボンは米国長老派海外伝道団から派遣された宣教医師として安政六年(1859)十月に神奈川に上陸した。彼は赴任以前に

日本語の学習を始め、中国から日本へ渡る船中においてもその学習を怠らなかつた。安政六年(1859)七月十九日付のウォルター・ラウリー宛書簡①に次のように見える②。

航海中ずっと至極健康で元気です。読書をする時間はあまりありませんでしたが、「日本語文法書」と「約翰福音之傳」とは長い航海中、非常に有益でありました。それですから、今では日本字を読むのに苦勞しません。かなり満足にできる程度に翻訳することもできるようになりました。

神奈川上陸後の十一月二十二日付の書簡には、

日常生活に追われて、何かと周囲のことに気をくばることまでできないくらいです。だからといって、言語の研究だけは怠けていません。他人の助けなしで下僕や、大工や労働者と会話しなければならなかつたのです。けれども、そ

れがために日本語が大分上達したので、もつと組織的に研究したいし、また、もつと時間をそれに用いたいと考えています。日本語に關し正確な見解をまだ申し上げることができませんし、日本語の文章は漢文よりむずかしいことは間違いありません。口語体は同じようにむずかしいし、漢文より組み立てが違つております。しかし、これについての意見は将来に論じることになりましょう。

と書いている。翌万延元年（1860）には日本人の日本語の教師を雇うことができたようであり、五月十四日付書簡には、宿舎となつた古寺の一室を書齋として、彼と共に日本語学習に励んでいることが書かれている。

この部屋で、大部分の時間、日本人の教師と日本語をコツコツと研究しているのです。日本語はむずかしいですが、勉強は頼もしいほど進んで、だんだん言葉にもなれてきて、一日一日とわかるようになってきました。

しかし、十二月二十六日付書簡には、日本語は大変むずかしくわたしが予想していたよりもはるかにむずかしい国語だということに気がつきました。しかしわたしは別に恐れてはいません。忍耐すれば日本語に熟

達することもできないことではありません。きりひらいて行かなければならない大きな困難はほかではありません。それはわたしでもより以前にわたしでもほど日本語を研究した人がいないということなのです。たとえ何らかの手助けがあつたにしても、結局はわたしでも自身でやり遂げなければならぬからです。

わたしは日本語の概要をほぼ完了いたしました。日本語の辞書を編集することによつて日本語を研究しているので、日本語で書いてあるやさしい書物をいくらか読んでいます。そして聖書を日本語に訳しはじめる日が一日も早く来ることを望んでおります。

と書いている。

彼の精力的な日本語学習の最終の目的は聖書の日本語訳にあつた。文久元年（1861）四月十七日付の書簡に、

日本語でどの程度の仕事ができるか、ためすためにマルコ伝を日本語に翻訳することを始めました。

と見える。それから約十年後、彼の福音書は次のように刊行された⁽³⁾。

『新約聖書卷之二』馬可傳福音書（明治五年〔1872〕秋刊）

『新約聖書卷之四』 約翰傳福音書 (明治五年 [1872] 刊)

『新約聖書卷之一』 馬太傳福音書 (明治六年 [1873] 刊)

『新約聖書卷之三』 路加傳福音書 (明治八年 [1875] 刊)

これらの訳文は具体的にどのような方法で作られたのかを明らかにしようというのが本稿の目的である。

1 通説への疑問

ヘボン訳福音書の訳語と漢訳聖書 (BC訳) の訳語との関係が御法川恵子氏によって調査されている⁽⁴⁾。ジェームス王欽定英訳聖書から取り出した単語およびそれに準じる細小意味單位七五語がヘボンの「ヨハネ伝」でどのように訳されているかを調査したものである。その調査結果は次のように整理されている。

- 第一類 漢訳聖書の訳語と同一の訳語 …… 三、五%
- 第二類 漢訳聖書の訓読と思われる訳語 …… 四二、二%
- 第三類 その他

- a 漢訳の意訳と思われる訳語 …… 一四、〇%
- b 漢訳と類似している訳語 …… 六、九%

c 漢訳と異なる訳語 …… 三三、四%

第一類の「漢訳聖書の訳語と同一の訳語」というのは、ヘボン訳で用いられている漢語 (字音語) が BC 訳の同じ箇所に見えるものであり、第二類第三類も同様の比較からヘボンの訳語を説明したものである。したがって、次のような結論が出されている。

その (引用者注) 漢訳聖書の訳語 利用は、唯機械的には行われていない。借用する場合に関しても、或いはその借用語の使い方に関しても、ヘボン訳聖書の訳語方針が鋭く働いている。(中略) その使い方においては、漢訳をそのまま即ち漢語のまま借用するのは、聖書特有語くらいで、他は漢訳語を如何に日本語らしい日本語しかもわかり易い日本語にするかに心をくだしている。

御法川氏の調査はヘボン訳が BC 訳に基づいて訳されたという前提でなされているのである。しかし、そうした捉え方がヘボン訳を正しく理解するものかどうか疑問である。というのは以下のような理由による。

第一類に属する語には、御法川氏の言われるように「聖書・聖霊・洗礼・十字架・割礼・会堂・祭司・安息日・預言者」な

ど「聖書特有の言葉」が比較的多いが、これらはヘボン訳が行われる以前に在華在日の宣教師の間で用いられていたもののようにである⁽⁵⁾。例えば、ロブシヤイド (W. Lobsheid) の『英華辞典』(English and Chinese Dictionary, Hongkong: 1866-69) には、

牧師 福音 降生 教会 救主 樂園 救世主 三位一体
聖書 洗礼 審判 浸礼 信徒 新約 使徒 天国 創世
記 祭司 牧者

といった語が見られ、ヘボン訳以前に日本で出版されたゴープル (J. Goble) の『摩太福音書』(明治四年〔1871〕年刻成) にも「会堂・預言者・聖靈・福音」などの語が見られる。したがって、御法川氏が、

ヘボン訳聖書の訳語の成立は、(中略) 中国の翻訳書である漢訳聖書の訳語に負うところが極めて大きい。殊に聖書特有の語の訳に果たした漢訳聖書の役割は甚大なものがある。漢訳聖書があつたればこそヘボン訳聖書の成立が可能だつたと言つても言いすぎではないと思われる。

と言われているのが、ヘボンの聖書特有の訳語が漢訳聖書に多くを負つたものであるということであれば同意できるが、ヘボ

ンの日本語訳がBC訳を基に作られたというのであれば、同意することはできない。

ヘボン訳福音書には聖書特有の語以外にも多くの漢語(字音語) が用いられている(本稿末資料参考)。

第二类「漢訳聖書の訓読と思われ、訳語」(傍点は引用者以下同じ) は「山・人・友・父・神・羊・羔・真・暗・多し・尊ぶ・誣ふ・証す・渴く・見る・降る・登る・坐す」などであり、第三類の a 「漢訳の意識と思われる訳語」は「新婦・律法・審判・兇銭・奇跡・奇跡・聖靈・褻流・義・栄き」などであり、b 「漢訳と類似している訳語」は「くれがた(暮・国たみ(国)・一七日(七日節)・あらわれみえる(顕・石にてうちころす(撃以石)・なしおはる(成)」などである。これらの訳語が漢訳聖書との関係からのみ説明されるべきものかどうか疑問である。例えば第二类の「山・人・友・父・神」などは英訳の mountain, men, friend, Father, God から訳されたとしても同じ訳語になるはずである。第三類 a についても英訳(あるいは原文) から訳し、その漢字表記に漢訳聖書を利用したということも考えられるはずである。例えば「新婦」(3・29) は、英訳には the bride とあり、漢訳は「新婦者」とあるが、『和英

語林集成』初版(1867年刊)には「HANAYOME、花婦 n, A bride」とある。ついでに「新婿はなむこ」(2・10、3・29)の英訳は a bridegroom、漢訳は「新娶者」であり、『和英語林集成』初版には「HANAMUKO、花婿 n, A bridegroom」とある。また、「七日ひちたまはりはじめの日」(20・1、20・19)は、マタイ伝にも「ひとまはりのはじめの日」(28・1)とあり、「ルカ伝」にも「七日間ひちたまはり」(18・12)とあるが、英訳では the first day of the week、the week とあり、漢訳では「七日節之首日」「七日間」とあるが、『和英語林集成』初版(1867年刊)の英和の部に「WEEK, Mawari」とある。

御法川氏が第三類 c として分類している「漢訳と異なるへボン訳語」は三三、四%に及ぶが、その中には英訳から訳されたと考えられるものが多い。御法川氏が「ヨハネ伝」から挙げられている例から抜粋すると次のようなものである。

【へボン訳】 【漢訳】 【英訳】

みやぎよめのいはひ 特別之節 the feast of the dedication

(10・22)

関係することあらず 無分 have no part with

(13・8)

金かねいれ 囊 bag (12・6)

(く)のひも 帯 latchet (1・27)

評議へうぎやく 議員者 council (11・27)

つかさ 正臣 nobleman (4・46)

あがめ 頌美 praise (9・24)

あがむ 聖別 sanctity (10・36)

組人 卒之隊 band (18・12)

みな 万有 all (3・31)

いなか 郷間 country (11・55)

あるく 遊 walk (21・18)

はたらく 行 work (5・17)

御法川氏は特に挙げられていないものにも英訳との関係が考えられるものが多い。例えば、

○耶蘇かれにいひけるは、われは途みちまた真まことまたいのちなり。

もしわれによらずんば人ひととして父にきたるものなし。(14

・6)

○われはいまより世よにをらず。かれら世よにをり、われはあなたにきたる。たふとき父ちちよ、われらのごとくひとつなるべきやうにわれにたまひしものをあなたの名なにおいてまもり

たまへ。(17・11)

○いま、われあなたにきたる。わがよろこびはかれらにみち
あらしめんために世よにてこのことをいふ。(17・13)

これらの「きたる」は漢訳では「就」とあるところである。
目的地に視点をおいた言い方であるが、明治十一年刊の委員会
訳は「ゆく」「いたる」に改められ、明治十三年刊『新約全書』
では「往ゆく」「就いたる」と表記されている。しかし、英訳では come
とあり、ヘボン訳は英訳を直訳したのではないかと思われる。
『和英語林集成』初版の英和の部には「COME, Kunu; chaku
-szru; kiaru; oide; nairu; tszku; törai szru; töchaku.」とあ
る。

御法川氏が言われているように、ヘボンの訳語は「日本語ら
しい日本語しかもわかり易い日本語」で訳されている。しか
し、それは単に漢訳聖書の書き下し文をいかに日本語らしい日
本語に訳し直すか⑥ということだけでそれが実現しているわ
けではないようであり、英訳聖書との関係からも考えてみる必
要があるう。

御法川氏の論文は昭和四十年〔1965〕に発表されたものであ

るが、ヘボン訳福音書の訳文は漢訳聖書の書き下し文に基づく
という考えは現在も変わることはない。それは御法川氏と同様
に訳語の類似を根拠にするものであるが、次のヘボン自身の書
簡の内容も根拠となっているようである（傍線は引用者、以下
同じ）。

文久元年（1861）二月十四日付北米長老ミッション本部宛

聖書を日本語に翻訳するということが、わたしどもの最も
重要な事業であると、わたしどもすべてのものが感じてお
ります。ですから、日本語の知識を習得し、日本語の書物
を読んで、その任務に適するよう努力している次第です。
わたしどもの語学の進歩はおそいし、文法や辞典や翻訳な
どに関し、人の助力を得ることもできず、やむを得ずわた
しども自らやるほかありません。けれども非常に励まされ、
前途洋々たるものがあります。わたしどもの日本語の
教師が少しの苦勞なく読み、そして理解し得る立派な漢文
の聖書が手許にあるから、聖書翻訳事業の助けとなつてお
ります。ブラウン氏とわたしとは、マルコ伝を翻訳する上
に大切な手引としてこの漢文の聖書を、日本文に訳し直す
ことによつて、さらに多少の進歩をみたのです。

同年四月十七日付ウォルター・ラウリー J. C. Lowrie 宛

日本語でどの程度の仕事ができるか、ためすためにマルコ伝を日本語に翻訳することを始めました。この翻訳をやってみて、中国における宣教師たちの訳したすばらしい漢訳聖書によって、非常な助けを受けたことを発見いたしました。実にこれは偉大なる助力でありました。それは日本語の聖書の基礎となつてゐるのです。日本語の聖書は漢字に日本語の格や動詞の語尾をはさんで熟語を作つて文章をつづつたものであります。これを例証するため「四書」からとつた一つの文章に日本語を添えてみます。(例証略) 教育のある日本人ならみな何の苦もなく漢文の聖書を読むことができます。ちょうど、われわれがラテン語を読むように訓点をつけて読むのです。ブラウン氏もこの仕事に従事しております。わたしどもの訳文を漢文の聖書と比較して、これを訂正するつもりです。

海老沢有道氏⁽⁷⁾は、これらの書簡を引用して「ヘボンがまず採りあげたマルコ伝は、漢訳の『馬可伝』を基に訳出されたものらしい」と言われ、永嶋大典氏⁽⁸⁾も「ヘボンとブラウンは、成仏寺居住中の一八六二年(文久二)、マルコ伝の漢訳か

ら日本語への転訳を試みた(二人ともすでに漢文に習熟していた)」と言われ、森岡健二氏⁽⁹⁾もまた、文久元年四月十七日付(および元治元年二月十一日付)のヘボン書簡を示し、「ここには、聖書の和訳が漢訳聖書に基づいてでき上がったことが率直に語られ」ていると言われている。

しかし、四月十七日付書簡に「日本語の聖書の基礎となつてゐる」というのはヘボン訳が漢訳聖書から訳されたということの意味しているのであろうか。同書簡には「わたしどもの訳文を漢文の聖書と比較して、これを訂正するつもりです」とあり、二月十四日付書簡にも「この漢文の聖書を、日本語に訳し直すことによつて、さらに多少の進歩をみたのです」とある。これらによれば漢訳聖書を参考にする前に原文また英訳から訳した「わたしどもの訳文」があり、それを漢訳聖書を参考に「訂正」したということになる。とすれば「日本語の聖書の基礎となつてゐる」というのは、ヘボンの、原文あるいは英訳から訳した日本語訳を訂正する段階において漢訳聖書を(おそろくは用語や文体の)参考に用いたという意味なのではなからうか。元治元年(一八五〇)二月十一日付書簡には、

わたしは聖書の各書の研究と翻訳を二カ年以上にわたり、

日本語教師とともに毎日の仕事としてきたのです。さらに福音書の或る部分を二、三度翻訳しておきました。(中略)

教養のある日本人は中国人と同じく、漢文の聖書を読みます。この漢文の聖書が基礎となり、学識ある日本語教師とかなり豊富な日本語の知識によって、聖書翻訳事業には多くの宣教師たちが克服しなければならなかったような困難は、わたしどもには無くて済みます。

とあるが、「漢文の聖書が基礎となり、学識ある日本語教師とかなり豊富な日本語の知識によって」できたのは、日本人補助者が提供した漢訳聖書の書き下し文であり、ヘボン訳そのものではないであろう。それを参考にしつつ、ヘボン訳は推敲されたものと考えられる⁽¹⁰⁾。

ところで、それによって「多くの宣教師たちが克服しなければならなかったような困難」が無くて済んだとヘボンが言っているのはどのような意味なのであろう。それはヘボンは日本人協力者によって提出された漢訳聖書の書き下し文をヘボンが「非常な助け」と感じたことと同じ意味であろうと思われる。

ヘボンは当初は、ギユツラフ (K. F. A. Gutzlaff) の『約翰福音之伝』やゴープルの『摩太福音書』などと同様に、だれに

でも読める平易な口語体で聖書を訳すことを目指していたものと思われる。W・E・グリフィスの『ヘボン』(佐々木晃訳 pp.122-3) 121、

ヘボン博士は日本の小説、歴史小説から恋愛小説、古典から現代流行しているものにといたるまで、大衆読物を含めて、幅広く読みあさった。『源平盛衰記』、平家のロマン『平家物語』等は、日本の古典的作品であつて、男女の別なく当時の知識層に広く読まれていた。博士はこれらを読んだ。日本の歴史観と、日本人の人間性とが変化しない限り自分の教えに耳を傾ける人は、女性と子供に限定されるだろうと考えた博士は、これも主の御用のためと思ひ、あえて数百にも上る低俗な大衆向けの読物さえもむさぼるように読んだ。その多くは不道德で、猥せつな内容であつたから、健全な人々からは敬遠されていた。しかし、博士は農夫が天然の肥料を素手で扱うように、低俗な本をあえて手にとつて読んだ。農夫といえども、決して好んで汚い仕事をするはずはない。ただ将来の豊作を楽しみにしてこそ、あえて天然の肥料を扱うのと同じ動機がヘボン博士の心に働いていた。

と書かれている。そしてヘボンもまた文久二年十月四日付書簡に「特に日本の本を読むことに注意をむけております。それに二つの目的があるのです。一つは日本人の考え方、ならびにこれを日本語に綴る方法に熟達すること、また語句を集めることです」とも見える。ヘボン訳は単に漢訳聖書を書き下したもののから作られたものではないであろう。

そうしたヘボンの努力を表わすと思われる訳語を一つだけ紹介する。

耶蘇をわたすものかれにあひ、号しあひをさづけていひけるは、わが接吻くちむすするものすなはちこれなり。それをとらへてしかとひきつれよ。すなはち、きたりて耶蘇にちかより夫ふうしとくといひて接吻くちむすせり。 (マルコ伝 14・44〜45)

接吻という行為を言う語にどのようなものがあつたかは、広田栄太郎氏の「接吻」と「くちづけ」(『近代訳語考』)や大葉正史著『接吻の文化史』(生活社シリーズ 1955)などに詳しいが、江戸時代にはクチスフ・スイクチ・アマクチなどの語が見られ、明治以降にはクチツケが用いられている⁽¹¹⁾。したがって、「マルコ伝」に見えるクチアヒは珍しい例である。あるいはヘボンは師に敬意を表わす行為としてクチアヒを考えた

のであろうか⁽¹²⁾。しかし、この訳語もヘボン自身、以降の福音書では用いられることはなく、「マタイ伝」(明治六年〔1873〕刊)では「接吻」(26・48、49)が用いられ、「ルカ伝」(明治八年〔1875〕刊)では「接吻」(22・47、48)が用いられている。『和英語林集成』には初版には接吻を意味する日本語は見えず、再版(明治五年〔1872〕刊)には「Okiss Kuchisu, Seppun sunu」、三版(明治十九年〔1886〕刊)には「Okuchisuke クチツケ 接吻 n. Kiss」また「KISS ty. Kuchisu, seppun sunu, kuchi-suke sunu」ある。

こうした地道な努力を積んでも日本語を母国語としない者は、日本語として自然な言い回しを学ぶことは容易ではないことをヘボンは悟つたにちがいない⁽¹³⁾。先に引用した安政六年十一月二十二日付のヘボン書簡に「日本語の文章は漢文よりむしろかしいことは間違ありません。口語体は同じようにむづかしい」とあつたが、ヘボンは聖書の文体として採用できるような口語体が日本ではいまだ確立していないという現実も知つたに違いない。

ヘボンが漢訳聖書の書き下し文を「助け」「大切な手引」「偉大な助力」と感じたのは、漢訳聖書の書き下し文は文語体では

あるものの、日本文として誤りのない文章であることは保証されているのであり、しかも漢文訓読体の文章は聖書の訳文として相応しい格調高いものとして教養ある日本人に認識されているものであったからであろう。したがって、それを参考に自分たちの目指す文体の日本語訳を作り出せば良いことになる。すなわち「多くの宣教師たちが克服しなければならなかったような困難」を回避することができる。そのことに気づいたヘボンは、彼の日本語教師に漢訳聖書の書き下し文の作成を積極的に要請している。明治二年（1869）にヘボンの日本語教師となった奥野昌綱（1823-1910）もまた、「明治五年の春に至り聖書の白文に訓点を附し始め」ているが（川崎巳之太郎編述『実験上の宗教』所収）、白文の漢文で聖書を読むことができた奥野にとって、この白文に訓点を付す作業は自身のためではなく、ヘボン訳の文章を訂正するためであったはずである。

2 ヘボン訳が漢訳から訳されたものではないことの証 左

明治二十五年にヘボンが米国に帰国する時に奥野昌綱がヘボ

ンに贈った長歌の中に「もろともに みふみひもとぎ みことばを 原語を わがくにの ことばに訳す きみが手の」とある（山本秀煌編『日本基督教教会史』日本基督教教会事務所発行、昭和四年刊 p.273）。ここに言う「原語」とは新約においてはギリシャ語文、旧約においてはヘブライ語文を指すものである。うが、実際には英訳聖書に多くを頼っていたようである。例えば「マルコ伝」にはそのことを示す次のようなものがある。

1 安息日過ぎてマグダラのマリアとヤコブの母なるマリア
およびサロメ、薫ものをかひ、耶蘇のしかばねを塗らんと
てきたれり。2 一七日のはじめの日は、かく日の出で
ろ、かれら墓にきたり。3 たがひにたれかわれらのために
石を墓の門よりまろばすものあらんかといへるに、4 目を
あぐれば石すでにまるるをみたり。これ石はなほだおほ
きければなり。

この傍線部は前の文脈と続かない。漢訳は、

3 相語曰、誰為^レ我移^レ石離^レ墓門^一乎。4 蓋其石甚巨也。望^レ
之、見^レ石已移^一。

とある。これによると、この文は誰か大石を転ばしてくる人は居ないかという、3 節に書かれている願いを起こした理由と

して、4節に置かれてあるものである。それがヘボン訳のような順序で訳されているのは、ギリシャ語原文（出典については後述）に、

〔3節〕 * (4)彼らは言っていた(3)むかつて(2)自分自身に(5)だが(1)転がしてくれるだろうか(6)私達のために(10)石を(9)から(8)入口(7)墓の

〔4節〕 * (1)そして(2)見上げると(6)彼らは見る(5)のを(4)転がされていた(3)その石が(10)あつた(7)それは(9)大きく(8)非常に

（彼女たちは互いに「だれかわたしたちのために墓の入り口からあの石をころがしのけてくれるだろうか」と話していた。ところが彼女たちが目をあげたとき、その石が元のところどころがしてあるのを見た。——というのはそれはとても大きかったのである。）

とあり、英訳に、

“And they said among themselves, Who shall roll us away the stone from the door of the sepulchre?” And when thy looked, they saw that the stone was rolled away : for it was very great.

とあるのが、句の順序のままに訳されたからであろう。

また、

ただちにパリサイの人とヘロデのともがらいで、いかにしてか耶蘇をころすべきやとあひはかれり。 (3・6)

とある。この訳によると、パリサイの人とヘロデのともがら一緒に室外に出たことになるが、原文、英訳、漢訳ともに外に出て行ったのはパリサイ人だけである。

* (1)そして(4)出て行つて(3)パリサイ人らは(2)すぐに(6)共に(5)ヘロデ党の人々と(12)相談を(13)していた(11)敵対して(10)彼に(7)なんとかして(8)彼を(9)殺そうとして

（ファリサイオス派の人たちは出て言つて、すぐヘーローデース党の者たちと彼に対し、彼を殺す相談をし始めた。）

And the Pharisees went forth, and straightway took counsel with the Herodians against him, how they might destroy him.

嗚喇曠人出、与「希律党」共謀、攻「耶蘇」将「何以滅之」。すなわち、本来は、

パリサイの人いで、ただちにヘロデのともがらと、いかに

にしてか耶蘇をころすべきやとあひはかれり。

などと訳すべきである。ヘボンの不自然な訳はどうして起きたのだらう。それを窺うことができると思われるのは、ヘボン訳の「ただちに」の位置である。この訳語は原文の「すぐに」また英訳の *straightway* に対応するが、漢訳にはない。そこで、次のようなことが想像される。ヘボンが原文または英訳から訳したものには、「すぐに」に相当する訳語はあつたであろう（ヘボン『和英語林集成』第三版「*STRAGHTWAY*, adv. *Tachidokero ni, tachinachi ni, sugu ni*」。しかし奥野の訳文には「ただちに」の語は無かった。彼は漢訳を参考に文を整えたからである。そこでヘボンの指示によって追加されることになったが、奥野は誤って文の冒頭に置き、それにあわせてパリサイの人とヘロデのともがらが一緒に出でて共謀したという文にしてしまったのではないかと思われる。

また、第十五章3節のギリシヤ語原文を直訳すれば「大祭司連はたくさんさんのこと（罪状）で彼を訴えた」となるが（漢訳も「祭司諸長以多端訟之」、ヘボン訳では、

祭司のをさいる〜と耶蘇をうつたへけれどもなにもこた

へず。

となつており、「なにもこたへず」という句が加えられている。これは英訳の、

And the chief priests accused him of many things : but he answered nothing.

によつて加えられたものであろう。

しかしなお、ヘボンは英訳のみを参考に訳しているのではない。漢訳の表現を参考に訳しているものもある。例えば、十字架上のイエスが絶命した時の英訳の表現は *gave up the ghost* あるいは *yield up the ghost* であり (*give up* || 引き渡す、まかせ、捧げる。 *yield* || 譲渡する。 *ghost* || 生命の源、 *principle of life*、魂、靈魂 *spirit, soul*)、*「魂を引き渡した」という表現である*。しかし、ヘボン訳でそのように訳しているのは「ヨハネ伝」だけである。それぞれの書のイエス絶命の箇所のヘボン訳、原文、漢訳、英訳を示すと次のとおりである。原文の通釈は岩隈直訳註『希和对訳脚注つき 新約聖書』（山本書店 1973）を利用し、対訳は川端由喜男編訳『日本語対訳 ギリシヤ語新約聖書』（教文館刊 1992）を摘要して掲げる。

【マルコ伝】（15・37）

「ヘボン訳」耶蘇おほいさによははりて息いきたえたり。

「原文」イエーシーズは大声を出して息が絶えた

(ἐξενέουεν)。

「漢訳」耶蘇大声一呼。氣遂絶。

「英訳」And Jesus cried with a loud voice, and gave up the ghost.

【ルカ伝】(24・46)

「ヘボン訳」耶蘇……父よ、わが靈たまひをなんぢの手に託たくくと、

かくいひて氣絶いきたえたり。

「原文」イエーシーズは大声で叫んで言われた。「お父さま、

あなたの御手にわたしの 靈を委ねます」。こう言つて彼

は息が絶えた(ἐξενέουεν)。

「漢訳」耶蘇大声呼曰、父与、我以我靈託爾矣。言竟、氣絶。

「英訳」And when Jesus had cried with a loud voice, he said, Father, into thy hands I commend my spirit: and having said

thus, he gave up the ghost.

【ヨハネ伝】(19・30)

「ヘボン訳」耶蘇……首かうべをたれて靈たまひをわたせり。

「原文」イエーシーズは……そして頭を垂れて靈を引き渡され

た(κατέκεν「渡した」to πνέουα「靈を」)。

「漢訳」耶蘇……俯首而其靈歸矣。

「英訳」When Jesus … he bowed his head, and gave up the ghost.

【ペタイ伝】(27・50)(14)

「ヘボン訳」耶蘇また大声おほいさでよばりて、その魂たまひをはなちぬ。

「原文」イエーシーズはもう一度大声で叫んで息が絶えた

(αὐτίκῃ「引き取つた」to πνέουα「息を」)。

「漢訳」耶蘇復大声而呼、釈其魂。「釈」は「すてる。はなす」。

「英訳」Jesus, when he had cried again with a loud voice, yield up the ghost.

3 ヘボン訳マルコ伝の訳文の具体的検討

ヘボン訳福音書で最初に刊行されたのは明治五年(1872)刊の「マルコ伝」と「ヨハネ伝」であるが、「マルコ伝」の訳文はヘボン訳の古態というべきものを多く遺している。そこで、「マルコ伝」を取り上げ、ヘボン訳と原文、英訳、漢訳を対照

させて、訳文がどのように成立しているのかを、具体的に見てみたい。ヘボン訳が何をもとに作られたのかを考えるには、単に語だけを注目すれば良いとは考えないからである。ただし、紙幅の都合上、冒頭の数節だけを掲げることにする。

原文は前述の川端由喜男編訳『日本語対訳 ギリシヤ語 新約聖書』を用いる。ただし、印刷の都合上、逐語訳された日本語訳だけを掲げる（ただし名詞の重複などの文法的説明は省く）。*印を付したのがそれである。川端氏が言われているように、原語を一つの訳語に限定するのは無理な場合もあり、他の訳語を当てることも可能であろうが、原文がどのような語句で構成されているのかを知ることができらるであろう。また、岩隈直訳註『希和对訳脚注つき 新約聖書Ⅰ マルコ福音書』は各語を日本語の語順に並べ替えて通訳の形にしているので、それも（ ）の中に示しておく。英訳は欽定英訳であり、漢訳はB C訳である。漢訳には『訓点新約全書』（明治十五年〔1882〕刊）を参考に返り点を付す。

1 神の子耶穌キリシトの福音のはじめ。

* (6)はじめ(5)福音の(3)イエス(4)キリストの(2)子(1)神の

（神の子イエース・クリストスの福音の始め。）

The beginning of the Gospel of Jesus Christ, the Son of

God.

神之子、耶穌基督之福音、其始也。

この節は全体の標題であるが、原文（また英訳）は漢訳のように文の形を取っていない。ギリシヤ語原文から訳すことにこだわったネンサン・ブラウン訳『志無也久世無志与』（明治十二年〔1879〕刊）も「神の子イエス、キリストの福音のはじめ」である。

2 預言者のしるされしごとく、視哉、われ汝の面前にわが使をつかはさん。これ汝の前にみちを設べし。

* (5)ように(4)書かれている(3)うちに(2)イザヤ(1)神の預言者(6)見よ(12)私は遣わす(11)使いを(10)私の(9)前に(8)顔の(7)あなたの(13)彼は(16)備える(15)道を(14)あなたの

（預言者（の書） エーサイアに、「見よ、わたしはあなたの途を準備させるために、わたしの使いをあなたの先に遣わそう」、「荒野で叫ぶ者の声（がする）」、『主の道を用意せよ、その通路をまつすぐにせよ』、と書いてある通りに、）

As it is written in the Prophets, Behold, I send my messenger before thy face, which shall prepare thy way before thee.

如し在「預言書」録云、視哉、我遣「我使者於爾前」、以備「爾道」。

「預言者のしるされしこと」は、As it is written in the Prophets を訳したもので、「如し在預言所」録を訳したものでないであろう。ただし、prophet は預言者を意味するが、the Prophets は旧約聖書の預言書を意味する。また、英訳では複数形であるが、ヘボン訳は単数形である。これは原文には「イザヤ」の語があるが、ヘボン訳にはないことと関係するのであろう。また「汝の面前」は原文の「前に・顔の・あなたの」、英訳の before thy face から訳されたものであろうが、むしろ漢訳の「爾前」(汝の前に)による方が日本語として自然な訳であろう。英訳(また原文)を直訳したために、時間的な前後関係を意味するものが空間的な前後関係を意味することになりかねないからである。また「視哉」と直訳された句も日本語としては不要であろう。

3 野によべる人のこゑありて、主の道筋を用意して、その

みちすじを正直にせよとなり。

* (4) 声がある (5) 叫ぶ者の (2) で (1) 荒野 (7) 備えよ (6) 道を (5) 主の (10) まっすぐに (11) せよと (書いてある) (9) 道すじを (8) その

The vice of one crying in the wilderness, Prepare ye the way of the Lord, make his paths straight.

野有二人声呼云、備主道、直其径。

この節の訳は原文・英訳・漢訳のいずれから訳しても同じようなものとなると思われる。

4 さて、ヨハンネ野において洗礼し、罪をゆるさるゝために、悔改るの洗礼を言ひろめたり。

* (12) 現れた (11) ヨハネが (3) バプテスマする (2) に (1) 荒野 (4) として (10) 宣べ伝える (9) バプテスマを (8) 悔い改めの (7) いたる (6) ゆるしに (5) 罪の

(洗礼者イオーアンネースが荒野に現れて、罪の赦しのための悔改めの洗礼を説いた。)

John did baptize in the wilderness, and preach the baptism of repentance, for the remission of sins.

約翰在野施「洗礼」、伝「悔改之洗礼」、俾得「罪赦」。

へボン訳の「罪をゆるさるゝために」「悔改るの洗礼を言ひろめた」という文の構成は原文(英訳また)と同じであり、漢訳の「悔改の洗礼を伝へ、罪の赦しを得しむ」(訓点本)とは異なる。

5 ユダヤ国中およびエルサレモンの人、かれにきたり、おのゝその罪を白状して、ヨルダネといふ河にて洗礼をうけたり。

* (1)すると(10)出て来ていた(9)ところの(8)彼の(3)すべての(2)ユダヤの(4)地方(5)と(7)エルサレムの人(複)が(6)すべての(11)そして(20)バプテスマを受けていた(19)から(18)彼(17)で(15)ヨルダン(16)川(14)告白して(13)罪を(12)彼らの(する)とイウーダイア全国(の)人びと)と、とくにイエルーサーレームの人たちがみな彼のところに出て来て、自分たちの罪を告白してイオルダーネース川で彼から洗礼を授けてもらった。)

And there went out unto him all the land of Judaea, and they of Jerusalem, and were all baptized of him in the river of Jordan, confessing, their sins.

拳^三猶太地、与^二耶路撒冷人^一、俱出就^レ之、悉在^二約

但河、受^二洗礼於^一約翰、各言^レ己罪。

この節においても「おのゝその罪を白状して、ヨルダネといふ河にて洗礼をうけたり」における罪の白状と洗礼を受ける順序は、原文(また英訳)と同じであり、漢訳の順序とは異なる。ちなみに漢訳「代表訳」では「拳^三猶太地、耶路撒冷人^一出就^レ之、各言^レ己罪、悉在^二約但河、受^二洗礼於^一約翰」となつて一致しているが、「代表訳」には「悉在^二約但河」に対応する句はない。

6 ヨハネは駱駝の毛衣を着、腰に皮の帯をむすび、蝗と野蜜を食す。

* (1)そして(18)いた(2)ヨハネは(5)着て(4)毛(複)を(3)らくだの(6)また(8)帯を(7)皮の(11)まわりに(つけ)(10)腰の(9)彼の(12)また(17)食べて(13)いなご(複)(14)と(16)蜜(15)野の(イオーアンネースはらくだの毛(の)衣服)を着、皮の腰衣を腰のまわりにつけ、いなごと野蜜とを食べていた。)

And John was clothed with camels hair, and with a girdle of a skin about his loins: and he did eat locusts and wilde honey:

野蜜を食す。

夫約翰衣^い駝毛^{たご}、腰束^{こし}皮帶^{かわおび}、食則蝗蟲野蜜^{こむぎ}。

「蝗^いと野蜜^のを食^みす」もまた、漢訳の「食は則^ち）蝗蟲野蜜なり」からではなく、原文（また英訳）から訳されたものである。

7 言^いひろめていひけるは、我^{われ}よりすぐれたるもの我^{われ}の後にきたるべし。我^{われ}は屈^かめてその草履^{ぞうり}の紐^{ひも}をとくにもたらざるほどの人^{ひと}なり。

* (1)そして(2)彼は宣^{のたま}へ伝えていた(3)言うのには(8)来る(7)より力^{ちから}ある者が(6)私^{わが}(5)あとに(4)私の(9)その人の(15)私^{わが}はあたしいしない(13)かがんで(14)とくにも(12)ひもを(11)くつ(10)彼の

(そして彼は教^{しゆ}えを説^といていった、「わたし^{わたし}のあとから、わたし^{わたし}がその靴^{くつ}の紐^{ひも}をとく値^ち打ち^{うち}もないうようなわたし^{わたし}より強い人が来^きられる。)

注に「方法^{かた}を示^しす副詞^{ふしじ}的用法^{てきようほう}の分詞^{ぶんし}「ひざまずいて」を入れる写本^{しゃほん}がある」とある。

And preached, saying, There cometh one mightier than I after me, the latchet of whose shoes I am not worthy to stoop down, and unloose.

宣^{のたま}曰^{いは}、有^あ一^{ひと}後^{のち}我^{われ}而^を来^き者^{もの}、勝^か於^を我^{われ}也^{なり}、即^{すなは}屈^か而^を解^と其^{その}履^{くつ}帶^{おび}、我^{われ}亦^{また}不^な堪^た。

「我^{われ}よりすぐれたるもの我^{われ}の後にきたるべし」も漢訳の「我^{われ}に遅^{おそ}れて来^きたる者^{もの}あり、我^{われ}より勝^かれたり」からではなく、英訳の「There cometh one mightier than I after me から訳されたもの」と考えられる。

8 われは水^{みづ}にて汝^{なんぢ}ら^らを洗^{せん}れせしが、その人^{ひと}は聖^{せい}靈^{れい}にて汝^{なんぢ}ら^らを洗^{せん}れすべし」。

* (1)私は(4)バプテスマをした(3)あなた方を(2)水^{みづ}で(6)彼は(5)しかし(11)バプテスマする(10)あなた方を(9)で(8)靈^{れい}(7)聖^{せい}(わたしは君^{きみ}たちに水^{みづ}で洗^{せん}れを授^{たま}へたが、その方は君^{きみ}たちに聖^{せい}靈^{れい}で洗^{せん}れを授^{たま}へられるであろう)。

I indeed have baptized you with water : but he shall baptize you with the holy Ghost.

我^{われ}以^{もつ}水^{みづ}施^{たま}洗^{せん}れ於^を爾^{なんぢ}、惟^{ただ}彼^{かれ}將^{まさ}以^{もつ}聖^{せい}靈^{れい}施^{たま}洗^{せん}れ於^を爾^{なんぢ}上^{の上}矣^{なり}。

9 そのころ耶蘇加利ヤのナザレよりきたりて、ヨルダンにおいてヨハンネの洗^{せん}れをうけたり。

* (1)また(5) (次のことが) 起^{おこ}つた(4)に(2)それらの(3)

日々(10)出て来た(6)イエスは(9)から(8)ナザレ(7)ガリラヤの(11)そして(16)バプテスマされた(13)で(12)ヨルダン川(15)から(14)ヨハネ

(そのころイエースはガリラヤのナザレトから来て、イオルダーネース川でイオーアンネースから洗礼をお受けになった。)

And it came to pass in those days, that Jesus came from Nazareth of Galilee, and was baptized of John in Jordan.

當時、耶穌自「加利利之拿撒勒」來、在「約但」、受「洗礼於約翰」。

以上の二節の日本語訳は原文・英訳・漢訳ともにおよそ対応するようである。

10 たゞちに水よりあがるとき、天のひらけて、聖靈鳩のかたちにてその身のうへにくだるをみし。

* (1)そして(5)すぐ(4)上がって(3)から(2)水(15)彼は見た(7)裂け(6)天が(8)そして(9)霊が(11)ように(10)鳩の(14)下ってくるのを(13)上に(12)彼の

(そして水から上がられるとすぐに、天が裂けて、(聖)霊がはどのようにに自分の上に下がって来るのを

「ごらんになった。)

And straightway coming up out of the water, he saw the heavens opened, and the Spirit like a dove descending upon him.

遂由「水而上、見「天開、有「聖靈如「鴿降「於其上」、
「たゞちに」は原文また英訳 straightway から訳されたのである(漢訳の「遂」にはその意味はないのではないかと思われる。『広雅』訓詁三「遂、竟也」。委員会訳では「頓て」と訳す。

11 また聲天よりありて「汝はわがこゝろにかなふたるわが愛子なり」と。

* (1)そして(4)声(5)あつた(3)から(2)天(6)あなたは(10)あ(8)子(7)私の(9)愛される者(12)で(11)あなた(13)私は喜(14)びを得た

(そして「あなたはわたしの息子、最愛の者である。わたしはあなたが気に入った」という声(11)が天(10)からきこえてきた。)

And there came a voice from heaven, saying, Thou art my beloved Son, in whom I am well pleased.

又有^レ声自^レ天来、云、爾乃我愛子、我所^レ喜悅^レ者也。

文を構成する句の順序は、原文、英訳、漢訳のいずれとも異なるが、日本語の構文に合うように変えられたものであろう。「愛子^{あいし}」という訳語は漢訳を利用している。

以上、冒頭の一部を示しただけであるが、ヘボン訳が原文（また英訳）を基に訳されたことは確かであろう。しかしまた、できあがっている日本語文が漢訳を参考に推敲されていることも確かである。しかし、それはヘボンの日本語訳を文章の形に整えるために利用されているだけにすぎない。訳の骨格は英訳あるいは原文から作られ、より自然な日本文にするために漢訳から訳語や漢字が利用されているのである。

〔注〕

(1) 以下ヘボン書簡は高谷道男編訳『ヘボン書簡集』（岩波書店、昭和三十四年〔1959〕刊）による。

(2) 「約翰福音之伝」はギユツラフ訳「約翰福音之伝」であるが、「日本語文法書」は飛田良文氏は「コリヤードの『日本文典』か、ロドリゲスの『日本語文典』か、J・J

・ホフマンによって校訂された、D・クルチュースの『日本語文典』のうちのいずれかであろう」と言われている。その根拠は「これらはヘボンとともに成仏寺で日本語の研究にたずさわったS・R・ブラウンの『Colloquial Japanese』の参考書となっているからである」（『和英語林集成』の著者とJ・C・ヘボン）『ヘボン著和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』第3巻「英和の部」〔A-Z〕解説」、港の人 2001年刊）。ブラウンの『Colloquial Japanese』は文久三年（1863）の刊であるが、その自序に「Collado's *Arts Grammaticae Japonicae* 1632. *Grammaire Japonaise*, 1825. *Rodriguez' Grammaire Japonaise*, 1825. *The Japanese-Portuguese Dictionary*, 1603; and the work by M. J. R. Donker Curtius, edit by M. L. J. Hoffman, Leipsic, 1857; have been his most valuable aids, more especially the last named.」とある。

(3) 明治六年（1873）のニューヨークのミッション本部でのヘボンの講演「日本ミッションの起源」に、一八六七年（慶応二年）八月、バラ師とタムソン師とわたしとがマタイ伝を翻訳するため施療所に集まった

が、これは約九カ月かかって完了し、その翻訳は再度わたしが改訂し、さらにS・R・ブラウンとわたし自身とで改訂したのでありますが、これは一八七三年（明治六年）に出版した最初のマタイ伝の基礎となっているのです。しかしこれより前、一八七一年（明治四年）S・R・ブラウンとわたし自身とがマルコ伝の試訳を改訂しました。これは一八七二年（明治五年）の秋出版され、それからまもなくヨハネ伝が出版され、次次第です。

とある（高谷道男編訳『ヘボン書簡集』岩波書店 1957年刊 p.249に於て）。また、グリフィス（W. E. Griffiths）の“Hepburn of Japan and his Wife and Helpers”には、ヘボンは明治三年（1870）以前に四福音書を奥野昌綱の援助によって和訳し終え、さらにブラウン（S. R. Brown）と奥野の援助を得て訂正していたと言う（Dr. Hepburn had translated the four Gospels with the help of Okano, and these were revised by Dr. S. R. Brown and himself, with Okano's assistance. p.142）。

また、S・R・ブラウンの明治五年九月四日付書簡に

は、

マルコによる福音書は、今、印刷者の手に渡っていて、一、〇〇〇部、まずしあげられましょう。（中略）ヘボン博士もまた、今、ヨハネによる福音書の木版を、江戸で作らせています。間もなく、印刷されるでしょう。マタイによる福音書とルカによる福音書も、間もなく出版されるでしょう。

とある。

(4) 御法川恵子「聖書和訳とその訳語についての国語学的研究」〔東京女子大学日本文学研究会『日本文学』二十五号 1965年発行〕

(5) 聖書翻訳委員会で、「洗礼」を用いるか原語を音写したバプテスマを用いるかが問題になった時、「洗礼」支持者は既に説教のおり用いているという理由を挙げたという（S・R・ブラウン明治八年〔1875〕三月十日付J・M・フェリス宛書簡。ブラウン書簡は高谷道男編訳『S・R・ブラウンの書簡集 幕末明治初期宣教記録』（日本基督教団出版局、昭和四十年〔1965〕刊）に於て）。

(6) 望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』（新潮選書、新潮社、

昭和六十二年〔1987〕刊。p.169) もまた次のように書か
れている。漢訳聖書の書き下し文からヘボン訳が作られた
と考えられていることには同意できないが、ヘボンの日本
語訳聖書に対する態度は言われるようなものであったと思
われる。

訓読文は日本語聖書への手蔓としては便利であった
が、ヘボンの目にはあまり生硬で「きわめて不完全な
文章」(J・ラウリー宛、文久二年〓一八六二秋)と
感じられた。そこでヘボンは読み下し文を磨くことに
した。

爾其中ニ永生ヲ得可クシテ聖書ヲ探索ス。我が為
ニ証ヲ為ス者即之ナリ。

という文を例にとると、先ず漢語の部分^①を和語に置き
換える。「永生」を「かぎりないのち」に、「探索」
を「さがす」とか「えらぶ」に変える。さらに「我が
為ニ」以下を「この聖書はわれについてあかしするも
のなり」とするなど、リズムのある文章を生み出す操
作を加えなければならない。

聖書は、格調高い、簡素でありながら、詩情あふれ

る文で綴られている。だから老若男女、字の読めない
者さえが暗記し、口づきんで魂の糧として続けてき
た。どの国の言葉に翻訳してもそうであるべきものだ
とヘボンは信じ、ジェームス王欽定訳の英語聖書のよ
うな、簡素であつて香りの高い、非のうちどころのな
い文にしたい、是非そうしなければならぬと考えたの
である。

(7) 海老沢有道『日本の聖書―聖書と訳の歴史―』(日本基
督教団出版部、1964) p.121

(8) 永嶋大典「聖書邦訳史略述」(ゆまに書房『幕末邦訳聖
書集成 別冊』1999)

(9) 森岡健二『近代語の成立』<sup>明治期
語彙編</sup>(明治書院、1969) 第
七章「新約聖書の和訳」p.190.

(10) S・R・ブラウンの慶応元年〔1865〕十月三十一日、J
・M・フェリス宛書簡にも次のように見える。

現在、わたしのおもな仕事は、聖書の翻訳です。ふた
りの日本語教師を、毎日、一時から五時まで雇ってい
ます。彼らは、まず、漢訳の聖書を開いて、できるか
ぎりよい訳をします。それから、わたしは、ギリシヤ

語またはへブル語の原典と照らして、彼らといっしょ
 において訳文を調べ、手許にある聖書を、わたしの力の
 及ぶかぎり、最も適当な訳文に訂正するのです。

- (11) クチスフ・スイクチは柴野貞毅『雑字類編』(天明六年
 [1786])に「相呂ウチスフ ○親嘴 ○喃唇」、森島中良の『紅毛
 雑話』(天明七年 [1789])に「彼邦のならばしに生別には
 手を握り顔をあはせ甚敷にいたりては呂字ウチスフなどして別を惜
 む」(巻二)、稲村三伯編『玻留麻和解』(1796)に「握手
 と扱口ウチスフの礼」「扱」は「吸」の誤りか)、本木正栄等『諸
 厄利亜語林大成』(文化十一年 [1814])に「Kiss 相呂ウチスフ」
 などと見られる。明治六年 [1873]刊永田方正訳『西洋教
 草』にもクチラスフ(接吻)とある(巻三5ウ)。アマク
 チはヘンデリック・ドウフ、吉雄永保等『道訳法児馬』
 (文化十二年 [1815])に「Kiss 接吻ウチスフ」とあるのが初出
 であると言い、それを継承した『和蘭字彙』(桂川甫周、
 安政二〜五年 [1855〜9])には「アマクチ」の読みになっ
 ていると言う。

- (12) ゴーブルの『摩太福音書』(明治四年刻成)にはシャブ
 ル(接吻)と見える(「接吻ウチスフらふもの」(26・43)「イエス

ウを接吻ウチスフました」(26・49)。

- (13) 明治二十五年にヘボンが アメリカに帰国する時の挨拶
 は次のようなものであったが(山本秀煌編『日本基督教会
 史』(日本基督教会事務所発行、昭和四年刊、pp.268-770)
 から引用)、山本秀煌氏は「博士は語林集成の編纂者にし
 て日本語学に精通したる人なりしも、日本語にて語ること
 は極めて不得手の方なりき、されば此の答辞も意余りあり
 て言葉通ぜざるの憾なきにあらざるも」と言っている。

我兄弟姉妹、あなた方が今日此送別会を設け給はりし
 を忝けなく思ひます。私は日本へ参りましては日本の
 内で老年と成りました。日本に居りましたは実に日本
 人を益する為でございました。…(中略)…私は此国
 の中に——キリストの畑に働きました、今は昔し六十
 年前已の心をキリストの為に捧げました時、外国に往
 て働くは善いと思ひ付きました。…(中略)…私は元
 来医者です、医学を卒業しました後、二十一歳の時か
 ら六年の間はアメリカにて善い場所を尋ねて——生活
 するに善い地位を尋ねて此処に一年彼処に一年所々に
 住みまし た、併しながら窃に安心せぬ所がありまし

た。何ぜ安心いたしませんでしたか、素よりアメリカ

の国を好んで居りましたけれども、医者が多くありま

して余計過ぎて居りました。(下略)、

(14) 「マタイ伝」の例については説明が必要である。岩隈氏は「息が絶えた」と通釈では訳しているが、字義は「靈魂を去らせた(出した)」と注している。また同氏著の『新

約ギリシヤ語辞典』(山本書店1971)の *an-tyu* の説明に

は、「①去らせる、行かせる。送り出す。暇をやる。(声を)

だす。(中略)②放棄する。〔見〕棄てる。棄て(置

き)さる。後に残す。そのままにしておく。」などの意味

をあげているが、①の用例のなかにこの「マタイ伝27・

50」の例を「息が絶える」と訳して挙げ、また、②の中の

イの意味として「(引き)渡す。与える」の意味を載せて

いる。すなわち、原文はヘボンのように訳すことも可能で

ある。

これらのヘボン訳を統一的に理解すると、ヘボンは原文から訳したと考えるべきであろう。漢訳とも一致するが、

それは漢訳が原文に忠実に訳されているものだからであ

り、それゆえにヘボンはその書き下し文を参考に日本語を

整えたのであろう。

「ヘボン訳福音書に用いられている漢語(字音語)一覽」(案)

固有名詞、数詞は除く。分類は暫定的なものである。キリスト教用語と考えられるものは他と区別して一括する。

キリスト教関係

マルコ伝 聖書・聖霊・洗礼・十字架・新約・福音・福音書

・預言・安息日・会堂・神殿・祈祷・預言者・使

徒・祭司・權威・威光・悪鬼・異国人・あゝめ亜孟

ヨハネ伝 聖書・聖霊・洗礼・十字架・割礼・祭司・安息日

・預言者・威光・權威・熱心(党)・悪魔・会堂

・あゝめ亜孟

マタイ伝 聖書・聖霊・洗礼・十字架・福音・新約・安息日

・預言者・威光・光明・權・權威・權勢・聖・信

仰・預言・懺悔・悪魔・悪鬼・異邦人・異国人・

会堂・あゝめ亜孟

ルカ伝 聖書・聖霊・靈・新約・福音・割礼・預言・十字

架・安息日・預言者・權威・權・榮光・信仰・祈

精神倫理心理等

禱・讚美・祝謝・使徒・祭司・惡魔・惡鬼・異邦人・會堂・亞孟

行為・社会活動

マルコ伝 休息・斷食・白狀・支配・押領・供養・扶助・議

論・往来・食事・挨拶・用・入用・用意・所持・

身代・領分・家督・乱・騒乱・姦淫・詭計・嘲弄

・評判・風声・凶殺・盜竊・謀反・惡事・惡口

ヨハネ伝 婚礼・給仕・許定・姦淫・自殺・自滅・証拠

マタイ伝 契約・約束・婚礼・離縁・命・交合・和睦・評定

・評判・敵対・公役・安否・風聽・禁食・斷食・

食事・飲食・掃除・婚礼・商売・計会・集会・往

來・封印・荷担・勘定・所持・支配・乱・運上・

人税

ルカ伝

一揆・籍こせき・生長・例・證問候しょうもんこう・刑罰・在位・介

抱・食事・飲食・禁食・婚禮・婚筵・供事・掃除・問安あいうち

・奉納しょうな・貿易しょうばい・政事・和睦・放蕩・所管しほい

人・人体關係

マルコ伝

學者がくしゃ（士子）・長老・古人・偽善者・医者・隊長

・師・王・長・夫子・門徒でし・主・評議人・奉行・

門番・農夫・下婢・盜賊・變化へんげ・群集・諸人・万

民・万国人・異人

ルカ伝

智慧・榮華・不思議・恩・全備・顯示・応驗・聖

・善・義・精神・氣・愛・信・忠・忠義・全快・

惡・惡事・慾・貪慾・偽善・貪心・益・不義・姦

淫・罪狀・戲弄・証拠・死罪・患難

ヨハネ伝

益・惡・慾・忠義・罰・死罪・關係

マタイ伝

惡念・色情・淫事・淫欲・惡・姦惡・姦淫・好色

・覺悟・忠義・器量・万事・自由・余義・益・身

上・支配・相当・苦勞・無理・死罪・刑罰・生命

・血肉・充滿・默然もくねん・閉口・精神・智慧・宗旨・

清淨・嘲弄・罪狀・義・仁・信・忠・智慧・愛情

・奧義・不思議・証拠・柔和・難義・偽善・不法

・風聞

ヨハネ伝 主・夫子・門徒・博士・盜賊・支配人・師・王・

評議(役)・役人・代官・家来・下女・先祖・親類・兄弟・父母・朋友・姉妹・愛子・親屬・小兒・小子・男女・自分・自身・肉体・容貌

マタイ伝 義人・偽善者・主・博士・学者(士子)・智者・

祭司・教師・方伯・寺人・領主・役人・大王・

女王・師・門徒・信者・家来・士卒・医者・使者・裁判人・証人・變化へんげ・盜賊・農夫・軍勢・客・衆敵・庶族・傍輩・系図・歷代・先祖・兄弟・姉妹・愛子・(父母)・妻子・男女・婦・五体・人

ルカ伝

間・万人・全身・骸骨・肉体・血肉・容体・生命・義人・惡人・偽善者・罪人・不信者・主・師・教師・士子・王・女王・主人・營事・有司・証人・士卒・兵卒・医士・裁判人・議事官・教師・医者・農夫・天軍・軍勢・多賓・敵・死人・偵者・客・一斉・父母・妻子・男子・兄弟・姉妹・愛子・親類・親戚・先祖・祖・朋友・群集・万民・他人・癩人(者)・全身・胎内

食物・道具など

マルコ伝 食物・穀・野菜・食事・没薬・葡萄・蠟石・衣服

・草履・夜具・盆・驢馬・椀・膳・銀・賽銭・四文錢・金子・書籍・離縁状・符合

ヨハネ伝 食物・葡萄・没薬・棕櫚・驢馬・武器・蘆薈・案

・印・判

マタイ伝 食物・野蜜・万物・礼物・黄金・金・銀・錢・金

子・銀錢・乳香・没薬・燭台・真珠・綿羊・葡萄・道具・蠟石・盤・膳・奉納金・駱駝・驢馬・綿羊・薄荷・茴香・馬芹・喇叭・身代・全業・劍・賽錢箱・千万金・礼服・離縁状・利息

ルカ伝

食物・食・給糧・万物・香・香料・香壇・葡萄・薄荷・芸香・野菜・金・銀・硫・蠟石・驢馬・燭台・台(案)・壘・器具・衣服・所有・業・遺業・財囊・金錢・銀子・負債・庫・養生資・詩・篇・文字・利(利子)・次序・自然・災害・病氣

マルコ伝 地震・震動・開關・飢饉・災難・癩病ちゆうぶ・癩病

ヨハネ伝 熱

マタイ伝 地震・洪水・逆風・飢饉・癩病・癩病・熱病・熱

・疫病

ルカ伝 地震・震動・飢饉・洪水・饑・疫病・癩・癲瘋・

血漏・腹脹・腫物

場所・建物など

マルコ伝 天・天地・世界・世界中・国中・地獄・四方・土

地・絶壁場所・海上・在(郷)・城下・巢窟・家

内・座敷・高坐・上坐・座・同席・坐中・評定所

ヨハネ伝 天・地・門・廻廊・玄関・吟味所

マタイ伝 天・地・天地・天国・地獄・地球・世界・天下・

地上・土地・異邦・海陸・海中・途中・郡下・四

方・城下・席・吟味所・公会・(戸)牒・石碑・

壇・臺・門・裁判所・公庁・坐上・席上・上座・

高座・遠方・聖処(せいじょ)・家内

ルカ伝 天・地獄・天下・天地・万国・四方・国中・世界

・世界中・諸国・諸地(隨在)・遠国・田地・領

地・城中・城下・集議所・門・坐・高座・上座・

末位・同席

時間・日月

マルコ伝 今日・今夜・永久・刻限・前日・日夜・途中

ヨハネ伝 翌日・(祭の)節

マタイ伝 今日・今夜・誕生日・終日

ルカ伝 正午・今日・翌日・畢生・晝夜・數万・多年・寸

陰・途間

副詞(一・一の・一に・一なり)

マルコ伝 默然・明白・実・例・銘々・種々・一体

ヨハネ伝 不思議・例・明白・大事・一々

マタイ伝 清淨・分厘・分・尺寸・全一

ルカ伝 一切・安然・遂・平安・安心・安全・默然・当然

・小事・大事・無用・実・一々

序数詞など

マルコ伝 一人・一倍・第一・一篇

ヨハネ伝 一人・一斤・一両・一間・一尾・一里・一年

マタイ伝 一人・一代・一日・一年・一点・一画・一里・

一錢・一倍・一斗・一杯・一疋・一字(時)・一余

ルカ伝 一人・一歳・一ヶ月・一年・一日・一日・一時・

一艘・一倍・一枚・一分・一更・一家・万人・

一斗・一斛・一斤・一方・一階(樓)・一里・第

一

一字漢語サ変動詞

マルコ伝 愛す・応ず・禁ず・減ず・坐す・散ず・死す・謝す・祝す・熟す・食す・属す・対す・俯す・服す

・命ず・約す・訊す・領す・論ず

ヨハネ伝 坐す・死す・食す・触す・信ず・命ず・任ず・滅す

マタイ伝 愛す・淫す・応ず・感ず・禁ず・坐す・死す・謝す・祝す・生ず・食す・信ず・拝す・倍す・命ず・約す・論ず

ルカ伝 愛す・害す・坐す・死す・謝す・祝す・食す・信ず・任ず・拝す・服す・命ず・約す・論ず・弁ず・利す

